

卽此以金相輪廓而衍之爲柄紐制其未分則爲一岐則爲二、如市肆中等子匣又孫參政景章亦有一具云以良馬易得于西域似聞其名爲優逮則其二字之訛也蓋鑿鑿乃輕雲貌如輕雲之籠日月不掩其明也若作鑿鑿亦可、

右愼懋官花夷珍玩續考に見へたり、眼目昏倦の人老人など書を讀に重寶の器なり、若年の人もこれをかくれば、眼力を養助て、老後目力つよしと云、舶來のもの、此土にて製するもの世に多し、おのゝ硝子にて作る、よきものは水晶にて作る、或人水晶の眼鏡をかけ、書を讀てありしが、天の陰陽を試んとて窓をひらき天を見る、日光水晶にうつりて、たちまち兩眼盲となりしとや、愼べし、今并記して世に知らしむ、恐るべし、

硝子より水晶目を助養によしと云、其是非未試、くもりを拭には、やはらかなる絹を用ゆべし、燈心などはあし、但し硝子と水晶と見わけがたきは、舌にてねぶり見るべし、其冷かた水晶也、別て夜學に用ひて、燈煙目にいらすしてよし、

眼鏡種類

〔和漢三才圖會二十六服玩具〕眼鏡 鑿鑿 女加禰

百川學海云、鑿鑿出於西域滿利國、如大錢色如雲母、老人目力昏倦、不辨細書、以此掩目、精神不散、筆畫倍明、

按鑿鑿眼鏡也、用水精切片以金剛屑磨琢造之、隨老壯有異、如老眼爲微凸、如壯眼表裏正直、如中老表正直裏微窪、但老人以壯眼鏡視、則遠物鮮明、而近物不明、

近眼鏡 表微凹裏微凸、

遠眼鏡 作三重筒、伸縮各口嵌玉、其本玉如老眼鏡、中與末如壯眼鏡、但本朝所作者不能視三里以

上也、宜用阿蘭陀青板、蓋此彼國硝子矣、與和硝子合鎔之、則甚堅而不解、

蟲眼鏡 玉厚表凸裏平、嵌盒、投蚤蝨視之、其形大而蚤似獸蝨似蟻、其餘細物亦然、